

叙述部の主観性による「あの（ア系）」の 許容度について

柳 敬 姫

YOU Kyunghée

〔要旨〕 現在、日本語教育の現場においてもっとも支持されている「その」と「あの」の使い分けに関する説は、指示対象が一方だけの知識か共通知識かによって使い分ける久野(1973)の説である。久野(1973)で説明できない例については、黒田(1979)や金水・田窪(1990, 1992)などにより解決されたといえる。それでもまだ久野説の方が支持されている理由は学習者にとってはそちらの方がわかりやすいからであると考えられる。

本稿では、話し手一方だけの知識や体験を述べる時の「その」と「あの」の選択要因は、指示詞を含む節の叙述部にあると考え、日本語母語話者を対象としたアンケート調査を行い、分析・考察した。その結果、「その」と「あの」の使い分けは叙述部の主観性に関わるが、述語そのものだけではなく、前後の文脈が影響するということがわかった。それにより、「その」と「あの」のどちらを用いるかは、述語そのもので決まる第1段階と、述語だけでは判断が難しい中間領域の場合、文脈上の話し手の気持ちで指示詞が決まる第2段階があり、この2つの段階を経て決定されるという結論に至った。

第1段階では叙述部で述べている事柄が明確に話し手の主観（意見・感想・評価）である場合は「あの」が、主観が全く入っていない事実の描写の場合は「その」が選択される。第2段階では、ある程度話し手の主観を帯びるような叙述部であっても、文脈上、話し手が事実だけを伝えようとする場合は「その」、叙述部の述語が主観性を帯びない場合であっても、文脈上、話し手の主観的な意見・感想・評価などを含む場合は「あの」と決定されるのである。

〔キーワード〕 指示詞、ア系、ソ系、叙述部、主観性

〔Abstract〕 In Japanese language teaching classrooms today, the most widely supported explanation for the difference in usage between sono and ano is that of Kuno (1973), who explains that the choice between the two indicatives is based on whether the object being indicated is shared as common knowledge of the speaker and the audience. Cases that Kuno (1973) could not explain can be considered to have been resolved by Kuroda (1979) and by Kinsui and Takubo (1990 and 1992), among others. The fact that Kuno's theory still commands greater support can probably be attributed to the fact that Japanese learners find it easier to understand.

This paper takes the position that the reason for choosing between sono and ano in an account that tells only of the speaker's own knowledge and direct experience will be found in the narrative portion, to include the demonstratives. A questionnaire survey of native Japanese language speakers was conducted and the responses were analyzed and examined. It was found from the results that the choice between sono and ano is related to the subjectivity of the narrative, but it is not a matter just of the predicate itself, and is rather influenced by the context. Therefore, the question of whether to use sono or ano has a first stage that is determined by the predicate itself, and when the question falls into an intermediate area where it is difficult to choose based on the predicate alone, there will be a second stage whereby the demonstratives will be determined by the speaker's feelings relative to the context of the utterance. The conclusion here, therefore, is that the choice is determined as the matter passes

through these two stages.

When the substance of the predicate phrase is clearly being presented as a matter of the speaker's subjectivity (as opinions, impressions, or evaluations) in the first stage, then *ano* will be chosen. If subjectivity is totally absent, and the description is factual, then *sono* will be chosen. In the second stage, even if the predicate phrase is to some extent infused with the speaker's subjectivity, if the context indicates that the speaker is conveying only facts, then *sono* will be chosen. Likewise, even if the predicate is not infused with that subjectivity, if the context indicates that the utterance includes the speaker's subjective opinions, impressions, evaluations, and so on, then the decision will be for *ano* instead.

[Key Words] Demonstratives, a-series, so-series, predicate phrase, subjectivity

1. はじめに

指示詞の用法の分類は研究者によって様々であるが、その主な内容は迫田（2001）がまとめた表1のような分類である。

表1 迫田(2001)による日本語指示詞の主な用法

・ 現場指示用法		目の前にあるものを直接指す場合
・ 非現場指示用法	文脈指示用法	話の文脈に指示対象が示されており、それを指す場合
	観念指示用法	文脈には指示対象が明示されておらず、話し手の頭（考え）の中にあるものを指す場合

日本語教育において、指示詞は初級で取り上げられる項目であるが、非現場指示用法については詳しく説明されていない場合が多いため、誤用が目立つ。特に学習者の非現場指示において問題になるのは「その」と「あの」の使い分けである。

本稿ではソ系・ア系の選択と叙述部との関係について考えてみたい。

2. 先行研究の問題点および本稿の立場

久野(1973) は文脈指示においてのソ系とア系の使い分けについて、次のように述べている。

アー系列：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。

ソー系列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知らないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。(久野 1973：185)

話し手と聞き手の共通知識か一方だけの知識かによって使い分けるといふこの論は日本語教育現場で支持されている。

(1) 太郎：今度みんなでモズカフェに行こう。

花子：{その/*あの⁽¹⁾} お店どこにあるの？ (作例)

例(1)では、花子は「モズカフェ」というお店を知らないため、「あの」は使えないが、例(2)(3)のように、話し手だけが知っている指示対象をア系で指し示すことができる場合がある。

(2) 以前、田中という人と仕事をしたことがあるけど、あの人の頑固さにはまいったよ。

(日本語記述文法研究会(2009)を参考にした作例)

(3) 僕は大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君もあの先生につくといいよ。

(金水・田窪1990：130)

例(2)の「田中」と例(3)の「山田先生」は「という人」「という先生」でわかるように話し手だけが知っている人物であるが、話し手はその指示対象を「あの」で指し示しており、これらは久野(1973)では説明できないのである。

ソ系とア系の選択要因については、久野(1973)以降、黒田(1979)や金水・田窪(1990, 1992)などで議論が続けられた。黒田(1979)は上で述べた久野説に対し、次のように述べている。

指示詞ソ・アの選択に真に本質的な要因は、話し手及び聞き手が対象を「よく知っているかいないか」ということではなく、話し手が、指示詞使用の場面において、対象を概念的知識の対象として指向するか直接的知識の対象として指向するか、ということにあるのである。(黒田 1979：102)

すなわち、聞き手に概念として理解される対象は「その」を、概念だけからでは知り得ない話し手の直接的知識に基づいた対象は「あの」を用いるのである。金水(1999：73)は、この黒田の主張について「聞き手の知識はソとアを選択にとって本質的ではなく、対象の意味論的な差異が重要だとするのである」と説明している。

また、金水・田窪(1990, 1992)は談話管理理論に基づき、「特に理由がない限り、話し手の直接経験的領域に存在する対象は直接経験的対象として指示する」(p.189)とし、直接経験はア、間接経験的領域のものはソで指すと述べている。

筆者も黒田(1979)や金水・田窪(1990, 1992)の説は正しいと考えるが、これらを日本語教育の現場で学習者に提示し、理解させることは難しいと考える。黒田(1979)や金水・田窪(1990, 1992)などが久野(1973)の問題点を解決したといえるにもかかわらず、現在日本語教育現場で久野説が支持されているのはなぜだろうか。それは、久野説の方が学習者にとってわかりやすいからではないだろうか。本稿の最終目的は、日本語教育現場で生かせる、学習者にとって理解し

やすい「その」と「あの」の使い分け方を提案することである。そのため、(2)(3)のように久野(1973)で説明できないア系の使用について黒田(1979)や金水・田窪(1990, 1992)などを参考とし、分析・考察を進めていきたい。

金水他(1989)は「話し手が、聞き手と共通に体験していない出来事について述べる場合は、主に「その時」を用いる。「あの時」を用いることはできない」(p.35)と述べ、(4)の例を挙げている。

- (4) 私は、先週1週間休みを取って、釣りに行っていたのです。この魚は、~~その時~~/~~*あの時~~
私が釣ったもののうちの1匹なんですよ。(金水他1989)

しかし、(5)のような例を挙げ、一方だけの体験における「時」を述べる場合について、「話し手の特定の体験について尋ねられている時は聞き手が知らない出来事であっても、話し手が体験した出来事でありさえすれば、「あの時」が用いられる」(p.34)と述べている。

- (5) 「強盗に襲われたときは、どんな気持ちがしましたか」
「あの時は、恐くて、声もでませんでした」(金水他1989)

ここでもう少し先行研究で挙げられている、一方だけの知識や体験を述べる場面の例を見てみよう。

- (6) 昨日山田サントイウ人ニ会イマシタ。ソノ(~~*アノ~~)人、道ニ迷ッテイタノデ助ケテアゲマシタ。(久野1973)

- (7) 昨日山田三郎さんという人に会ったんだ。その/~~*あの~~人、大学時代の友達でね。
(吉本1992)

- (8) わたしは町外れの古ぼけたビジネスホテルに宿をとり、三日間~~そこ~~/~~*あそこ~~に滞在した。
(金水・田窪1990)

- (9) A: この本、ミラーという人が書いたそうなんですが、どこの人ですか?
B: 君、あの先生を知らないのか?(吉本1992)

同じく一方だけの知識・体験を述べているこれらの例のうち、例(4)(6)(7)(8)は「あの」が許容されない(もしくは許容度が低い)のに対し、例(2)(3)(5)(9)は「あの」の使用が許容されている。まず、「その」を用いる例(4)(6)(7)(8)について考えてみよう。例(4)は「釣りに行った時」を、例(6)は「道に迷っていた人」を、例(7)は「大学時代の友達だ」のような事実をもとに述べているという共通点がある。そこには話し手の意見・感想・評価などといった主観は入っていない。例(8)も同様である。

一方、例(2)は「まいったよ」という話し手の主観的な感想が、(3)は「あの先生につくといえよ」という意見が、(5)は感想が含まれている。吉本(1992: 115)は(9)の例でア系が聞き

手に対する非難めいた語調を出すのに利用されていると述べている。本稿では「非難めいた語調」に、話し手の聞き手に対する評価が含まれていると考える。これらの例 (2) (3) (5) (9) に含まれている意見・感想・評価などは、事実を述べているというより話し手の主観を含んだ発言であるといえる。これらのことから、本稿では話し手一方だけの知識・体験を述べる場合の「その」と「あの」の使い分けについて指示詞を含む節の叙述部に着目して考えたい。要するに、叙述部に話し手の主観が入っていると「あの」が許容されやすくなると考えるのである。話し手の主観的な意見・感想・評価などが含まれている叙述部の場合と、主観が入っていない事柄を述べる場合の例を挙げ、検討を進めたい。

3. 叙述部の主観性による「あの（ア系）」の許容度に関する仮説

第2節で見たように、一方だけの知識や体験を述べる場合であっても、叙述部に話し手の主観が入っている場合は「あの」の許容度が高くなることがあった。本稿では第2節で述べたことから、次のように会話において話し手だけが知っている、または体験している指示対象を指し示す時の「その」と「あの」の使い分けについての仮説を立てた。

- (i) 会話において叙述部に意見・感想・評価などの話し手⁽²⁾の主観が入っている場合は「あの」の方が適切であり、叙述部で事実など話し手の主観が含まれていない事柄⁽³⁾を述べる場合、「あの」の許容度は低い

4. 調査方法

上の仮説を検証するため、話し手一方だけが知っているもしくは体験している物事や人物について述べる場面において、話し手は「その」と「あの」のどちらを使うかを問うアンケート調査を行った。調査の概要は以下の通りである。

- ・目的：叙述部の主観性による「あの」の許容度についての仮説を検証
- ・対象：都内の大学の学部生100名(全員日本語母語話者・女性)
- ・実施日：2014年11月26日
- ・方法：アンケート調査。被験者には「その」か「あの」、また、「その」と「あの」が同じ程度で使える場合は「両方」と書くように指示した。
- ・アンケートの作成：アンケートは、話し手一方だけの知識や体験を述べる場面を設定し、指示詞を含む節の叙述部に主観が入っている場合は「あの」を、主観が入っていない場合は「その」を選ぶことを予想して作成した。

設問文の作成において、主観性を含む叙述部と主観が含まれていない事柄を述べている叙述部に分類し、主観の叙述部は「意見・感想・評価」という項目を、主観が含まれていない事柄を述べている叙述部には「事実」という項目を立てた⁽⁴⁾。表2はこれらを基準に作成した例文とそれぞれの叙述部の分類を表したものである。

表2 叙述部の分類

	例 文	叙述部
①	太郎：『市民ケーン』っていう映画見た？ 花子：何それ、初めて聞いた。面白いの？ 太郎：知らないの？いやあ、（あの）映画は本当に <u>傑作だったよ</u> 。	感想・評価
②	先週ボランティアに参加してきたけど、たまたまとなりにいた人がうちの妹にそっくりで、それに（その）人、 <u>私と同じ名前だった</u> 。	事実
③	太郎：『市民ケーン』っていう映画見た？ 花子：何それ、初めて聞いた。面白いの？ 太郎：知らないの？（あの）映画、すごく <u>面白くて毎日見たい</u> ぐらいだよ。	感想
④	高校の時5ヶ国語もできる先輩がいたけど、先週（その）先輩の『スペイン語と遊ぼう』という本が <u>出版された</u> ようだ。	事実
⑤	太郎：『市民ケーン』っていう映画見た？ 花子：何それ、初めて聞いた。面白いの？ 太郎：知らないの？すごく面白くて、僕、もう3回も見た。（あの）映画は絶対 <u>見たほうが</u> いいよ。	意見
⑥	うちのサークルにみきちゃんという子がいるんだけど、（その／あの）子、すごく <u>可愛くて</u> 、一緒にいると本当に <u>癒される</u> んだよね。	評価・事実／感想
⑦	さっき駅前で奇抜な格好をしている人を見たけど、おもしろくてずっと見ていたら話かけられたんだよね。 実は（⑦ その）人、高校の同級生だった。（⑦' その）子、3年ほどアメリカに留学行っ <u>てた</u> けど、先週帰ってきたんだって。で、来週同窓会をやることになった。	⑦ 事実 ⑦' 事実
⑧	太郎：『市民ケーン』っていう映画見た？ 花子：何それ、初めて聞いた。面白いの？ 太郎：知らないの？（その）映画、映画通の中では <u>20世紀最高の作品と</u> 言われているらしいよ。明日、映画サークルで上映会やっ <u>て</u> 聞いたけど、一緒に行かない？	事実・評価
⑨	僕は大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君も（あの）先生に <u>つく</u> といいよ。	意見
⑩	太郎：『市民ケーン』っていう映画見た？ 花子：何それ、初めて聞いた。面白いの？ 太郎：えー見てないんだ。（その）映画のDVD、アマゾンで <u>セール</u> やっ <u>てた</u> よ。	事実
⑪	以前、田中という人と仕事をしたことがあるけど、（あの）人の <u>頑固</u> さにはまいったよ。	感想・評価
⑫	太郎：『市民ケーン』っていう映画見た？ 花子：何それ、初めて聞いた。面白いの？ 太郎：知らないの？（あの）映画を知らないなんてウソでしょう。	評価

⑬	去年沖縄行ったときに民宿のおばあさんに「手相を見てあげる」と言われて。「28歳くらいに男の子を授かる」と言われたんだけど、（その）時わたし35歳だったんだよね。	事実
⑭	太郎：『市民ケーン』っていう映画見た？ 花子：何それ、初めて聞いた。面白いの？ 太郎：知らないの？（あの）映画見たら、花子ちゃんもきっとファンになるよ。	意見
⑮	先日おばあちゃんに聞いたのですが、10年前に亡くなったおじいちゃん、若い頃落語家を目指していたらしいんです。（あの）無口なおじいちゃんが落語家を目指していたなんてとても不思議です。	感想
⑯	太郎：『市民ケーン』っていう映画見た？ 花子：何それ、初めて聞いた。面白いの？ 太郎：知らないの？今ピカデリーで（その）映画ともう一本オーソン・ウェルズ監督の映画やってるから見てみて。	事実
⑰	うちの会社に田村という先輩がいるけど、（その）人は190センチもあって、会社で一番背が高い。	事実
⑱	太郎：「クモの唐揚げ」って食べたことある？ 花子：ない。そんなのがあるの？ 太郎：この間カンボジア行ったときに食べたけど、（あの）カリカリした食感と香ばしい味が忘れられないんだよね。	感想
⑲	太郎：『市民ケーン』っていう映画見た？ 花子：何それ、初めて聞いた。面白いの？ 太郎：え、知らないの？（その／あの）映画とても有名だよ。	評価・事実

表2の例文はアンケート用紙の設問と同様である。実際のアンケート用紙には（ ）の中は空欄であるが、ここでは本稿で意図した回答を書いておいた。

5. アンケート調査の結果

5.1 「あの」を用いると予想した例

まず、「あの」を用いると予想した例の結果である図1を見て考えよう。

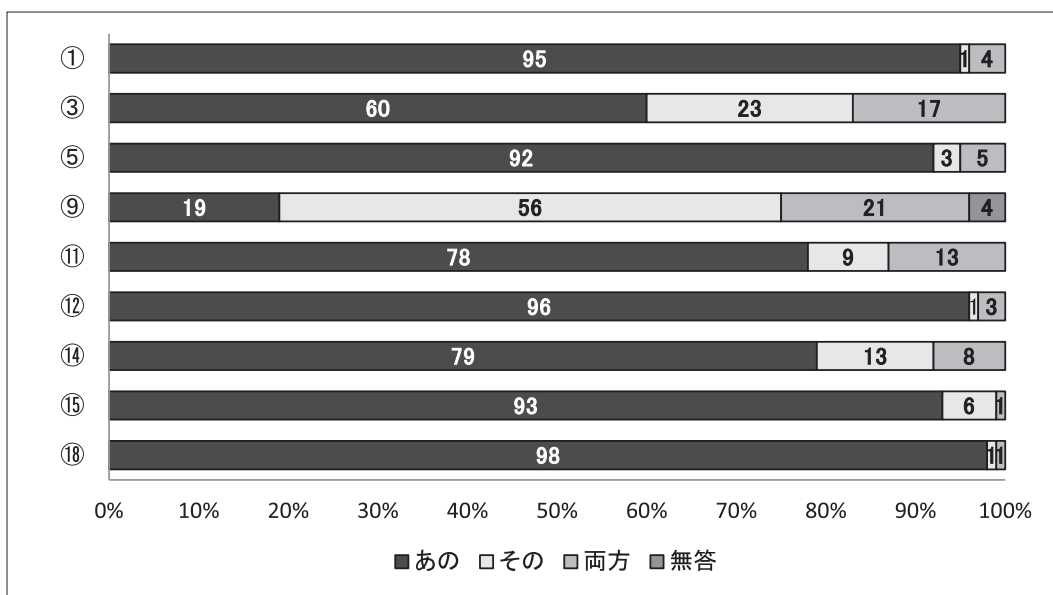


図1 アンケート結果—話し手の主観が含まれている叙述部の場合

図1を見ると、例⑨を除いた全項目において「あの」が半数以上選択されていることがわかる。「両方」の件数を「その」に含めて考えても、図1において「その」の選択は半数に満たない結果となった。

⑨は「あの」を用いる例として、金水・田窪(1990)から引用したものである。しかし、予想と違い、本調査では「その」の選択率が高い結果となった。⑤と⑨は両方とも話し手が聞き手に対して意見(勧める)を述べているが、⑤は「あの」が92%も選択されたのに対して、⑨は19%しかない。本稿ではその理由について、どういう文脈なのか、発言されていない話し手の気持ちはどのようなものなのかと関係があると考ええる。これについては次の第6節で詳しく述べる。

5.2 「その」を用いると予想した例

次は「その」を用いると予想した例の結果を見て考えよう。

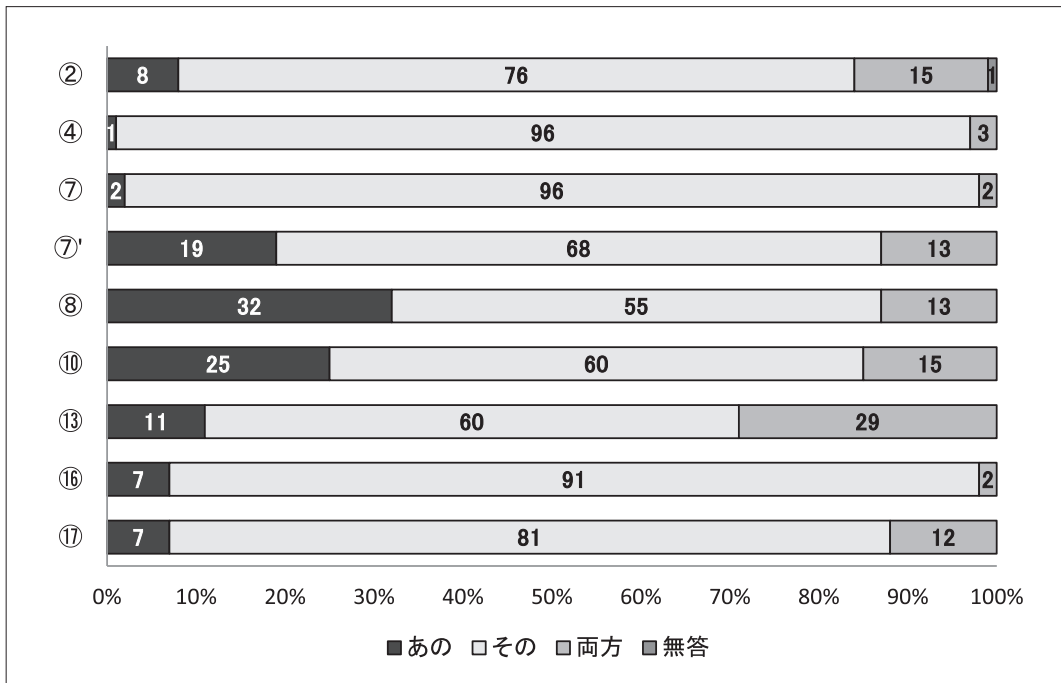


図2 アンケート結果—話し手の主観が含まれていない叙述部の場合

図2を見ると、これらすべての項目で半数以上「その」が選択されており、叙述部に主観が入っていない場合は「あの」が許容されにくいと考えられる。ただ、「両方」を「その」に含めても70%には満たない⑧については、事実を述べており、かつ、「その」の回答が「あの」より高いとはいえ、「その」が適切であるとは断言できない。「20世紀最高の作品と言われているらしいよ」という叙述部は、表面的には話し手の主観は入っていないが、文脈上、事実だけを述べているかを分析する必要がある。これも5.1節で言及した、文脈や発言されていない話し手の気持ちと関係があると考え、第6節で詳しく述べる。

5.3 「両方」用いられると予想した例

次は「その」と「あの」の両方を用いることができると予想した例である。

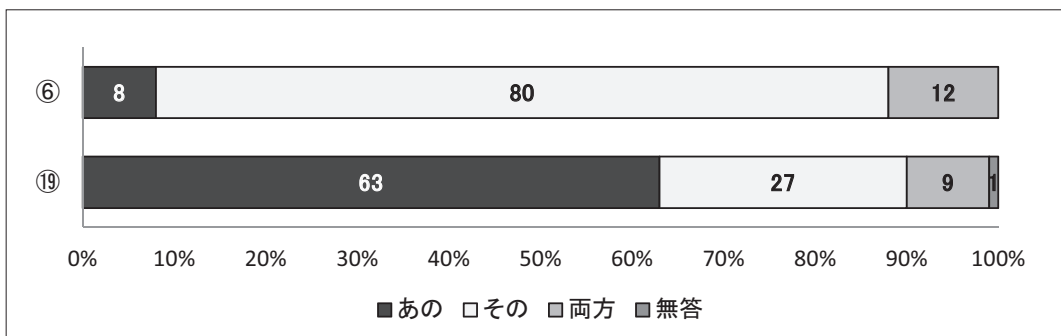


図3 アンケート結果—主観ともそうでないともとれる叙述部の場合

⑥は「可愛い」「癒される」、⑨は「有名だ」という述語で表現されている。これらの述語は話し手の主観ともいえるし、事実ともいえる。しかし、アンケート調査の結果では⑥の「可愛い」「癒される」は「その」の方が80%で、⑨の「有名だ」は「あの」の方が63%選択された。⑥と⑨ともに、叙述部は主観的とも事実を述べるともとれるのに、なぜこのような結果となったのだろうか。次の第6節では、この調査結果を分析し、それを踏まえて「あの」と「その」が選択される要因について考察したい。

6. 分析と考察

アンケート調査を行った結果、⑨を除いたすべての設問において、予想通りに「その」と「あの」が半数以上選択された。特に、話し手の主観が入っている文においては、久野（1973）の説明とは違って「あの」が多く選択される結果となった。ただ、設問③では他の項目と比べ「あの」の選択率が低いことは認めざるを得ない。⑭も若干低い結果となっている。しかし、③と⑭の「その」と「あの」だけを比較すると、「あの」の方が多く選択されている。これらのことから、叙述部に意見・感想・評価などの話し手の主観が入っている場合は「あの」の許容度が高くなるといえるだろう。

ところが、同じく主観性を含む叙述部であっても「あの」の選択率は多少異なる結果となり、事実を述べていて主観を含まない例であっても「その」の選択にばらつきが見られるのは何故だろうか。次の6.1節では各例文を分析し、「その」と「あの」が選択される要因について考察したい。

6.1 文脈や発言されていない話し手の気持ちによる「その」と「あの」の選択

ここでは第2節や第5節で「その」と「あの」が選択される要因の一つとして言及した「発言していない話し手の気持ち」について述べたい。まず、⑨の文を見て考えてみよう。

（3）僕は大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君もあの先生につくといいよ。

（アンケート⑨）

この例は黒田（1979）や金水・田窪（1990：130）などで「あの」が許容される例として挙げられたものである。本稿の調査でも「あの」を予想してこの例を設問に出したが、結果ではむしろ「その」の方が多く選択された。筆者の語感では（3）の例は「あの」方が適切であるとは考えるが、「その」が用いられても不自然さは感じない。ただ、この例において、「その」と「あの」にはニュアンスの違いがあると考ええる。「その」を用いると、単に話し手が大阪で教わった山田という先生がいるということだけを述べるようなニュアンスがある。一方、「あの」を用いると、山田先生につくことを聞き手に勧める場面において、先生のことを思い浮かべながら聞き手に「山田先生につく」ことを強く勧めるニュアンスが生じるように感じられる。この例について、金水・田窪（1990）は談話管理理論からこの（3）のような文脈ではアがかなり自由に使えると述べ、「共通ではない経験についての談話であるということが聞き手にとっても前提となっているので、一

応聞き手の知識を括弧にくくって談話を進めることができるのだと考えられる」と説明している。また、黒田（1979）は、聞き手に対して山田先生を「自分が教わった先生」という概念として理解される対象と捉え提示する時は「その」、言外に自分の直接的知識としての山田先生を指向し、先生のある資質を勧告の根拠としている時は「あの」が自然であると説明している。

以上のことから、⑨のアンケート結果で「その」の方がより多く選択された理由が予測できる。話し手が文の通りに自分が教わった山田先生につくことを単に聞き手に勧めていると考えた被験者は「その」を選択したと考えられる。また、黒田（1979）が述べたように、話し手が「山田先生のある資質」を聞き手に勧める根拠としていると考えた被験者は「あの」を選択したのであろう。

本稿では、黒田（1979）の「山田先生のある資質」といったものと、上で言及した「発言されていない話し手の気持ち」というものが類似していると考ええる。また、その話し手の気持ちというのが、仮説（i）で示している話し手の主観（意見・感想・評価）を含んで働く時、「あの」の許容度が増すのではないかと考える。例えば（3）において、「山田先生の研究スタイルや人柄が聞き手とよく合いそうだ」といった気持ちを含んで発言する場合は「君もあの先生につくといいよ」といえる訳である。

これらのことから、本稿では（i）の仮説に補足を入れ、「あの」が選択される要因について、（ii）のように仮説を立て直した。

（ii）話し手だけが知っているまたは体験している指示対象を指し示す時、

【第1段階(述語そのものを判断)】

1) 叙述部で述べている事柄が明確に話し手の主観(意見・感想・評価)である場合は「あの」、叙述部に話し手の主観が全く入っていない場合「その」

2) 中間領域は「その」と「あの」両方許容→指示詞決定のため第2段階に移動

(※中間領域：話し手の主観であるか事実の描写であるか、判断が難しい場合)

【第2段階(発言されていない、文脈上の話し手の気持ちで判定)】

3) ある程度話し手の主観を帯びるような叙述部であっても、文脈上、話し手が事実だけを伝えようとする場合は「その」、叙述部の述語が主観性を帯びない場合であっても、文脈上、聞き手に対する主観的な意見・感想・評価などを含む場合は「あの」と決定

すなわち、「その」と「あの」の決定には述語そのもので決まる第1段階と、発言されていない話し手の気持ちで決まる第2段階があると考えるのである。

ここでは「その」を予想した例の内、「あの」の選択が他の設問と比べて少し多く見られた⑧と⑩を見て仮説(ii)について考えたい。

(10) 太郎：『市民ケーン』っていう映画見た？

花子：何それ、初めて聞いた。面白いの？

太郎：知らないの？（ ）映画、映画通の中では20世紀最高の作品と言われているらしいよ。明日、映画サークルで上映会やるって聞いたけど、一緒に行かない？ (⑧)

例(10)の述語そのものには話し手の主観が含まれていないが、「あの」が32%も選択された。仮説(ii)で考えると、「映画通の中では20世紀最高の作品と言われている」という事実だけを伝えようとする時は「その」が用いられる。「あの」が許容されるのは、(9)と同様、その裏に「すごい映画なのに知らないの?」といった聞き手に対する非難など、主観が強く働くためである。吉本(1992)が(9)の例で「あの」は「聞き手に対する非難めいた語調を出すのに利用されている」(p.115)と述べたように、(10)でも「あの」が(9)の「あの」と同じ働きをしていると考えられるのである。

次は⑩の例を見てみよう。

(11) 太郎:『市民ケーン』っていう映画見た?

花子:何それ、初めて聞いた。面白いの?

太郎:えー見てないんだ。()映画のDVD、アマゾンでセールやってたよ。 (⑩)

(11)は、「アマゾンでDVDのセールをやっている」という事実だけを伝えようとしている時は「その映画」が用いられる。しかし、事実だけではなく、『市民ケーン』は本当に傑作だし、お勧めだよ。DVD買ってでも見た方がいいよ。」のような文脈の場合は「あの」を用いても不自然ではないと考えられる。実際に発言はされていないが、「本当に傑作だから、DVD買ってでも見た方がいいよ」という話し手の主観的な評価や意見などが含まれることにより「あの」許容度が高くなるのではないだろうか。

この「発言していない話し手の気持ち」というのがどのようなものなのかについて、「両方」用いると予想したアンケート⑥と⑨の例を見て考えてみよう。

(12) うちのサークルにみきちゃんという子がいるんだけど、(その/あの)子、すごく可愛くて、一緒にいると本当に癒されるんだよね。 (⑥)

(12)で話し手は「可愛い」と「癒される」という述語を用いて述べている。本稿の仮説において、このように叙述部で2つ以上の述語を用いる場合、どちら((12)の場合は「可愛い」と「癒される」)の述語の影響を受けて用いられる指示詞が決まるかは現在のところ不明である。そのため、(12)の叙述部について「可愛い」と「癒される」を分けて考えた。複数の述語を用いる文についての分析は今後の課題にしておきたい。

まずは「癒される」について考えてみよう。何かを見たり体験したりして「癒される」のは人それぞれであることから、「癒される」という述語は話し手の主観であると捉えることができる。しかし、「癒される」と感じるのは主観であるとはいえ、可愛いものや人を見ると癒されるのはほとんどの人が抱く感情ではないだろうか。近年、「癒し系○○」「癒しの○○」などの「癒し系」や「癒し⁽⁵⁾」という表現が多く使われていることから、その「癒し系○○」や「癒しの○○」を体験した多数の人は癒されるということがわかる。つまり、何らかの対象に癒されるということは個人の主観の問題であるとしても、ある集団や社会における「癒される」という語の使用に

については主観だけの問題ではなくなるということなのである。

次に、「可愛い」という述語について考えてみよう。筆者は可愛いと思うかどうかには個人の主観に関わるという側面と、多くの人にとって小さい子供や動物などは「可愛い」の対象になるのではないかという事実としての側面を認めて(12)の文を作成した。したがって、(12)の文は「その」と「あの」両方用いられると考えた。

近年、「かわいい」という日本語が世界で広く使われるようになってきている。また、「かわいい」文化についての研究も多くなされている。入戸野(2009)が大学生を対象に行った、かわいいと思う対象についての調査では「(1)かわいいと思う体験は対象の差こそあれ大学生で一般的に認められる、(2)女性の方が男性よりも幅広い対象をかわいいと思うことが多い⁽⁶⁾、(中略)(5)かわいい対象は基本的に生き物であるが、生物に対してかわいいと思う人は無生物に対してもかわいいと思うことがある」(p.26)という結果が出た。ある対象に対して「可愛い」と思うのは主観であるとしても、大多数の人が可愛いと思うのであれば、その集団においては主観性の薄い、事実として認められるのではないか。

入戸野(2009)の「大学生にとって、かわいいものによって気分が良くなり癒されるといった考えも強い」(p.32)といった説明から、可愛いものを体験して癒されることは事実ともいえる。本稿のアンケート調査の⑥において「その」を選択した被験者が多かった理由もこの入戸野(2009)の結果から推測できる。一般的に可愛いと思う対象によって癒されることは多数の人が体験することであり、そのため、「その」が多数選択されたのではないかと考えられる。

次は(16)の例を見てみよう。

(16) 太郎：『市民ケーン』っていう映画見た？

花子：何それ、初めて聞いた。面白いの？

太郎：え、知らないの？（その/あの）映画とても有名だよ。 (19)

アンケート⑥の「可愛い」「癒される」と同様、アンケート⑱の「有名だ」という述語も話し手の主観的意見・感想・評価とも取れるし、ある集団においては多数の人が認めている事実とも取れる。このように、「有名だ」「可愛い」または「優しい」などの述語は主観と一般的事実のどちらとも取れる。このような述語を用いる文では「その」と「あの」のどちらを使用しても不自然さは感じない。「その」か「あの」どちらを用いるかは仮設(ii)で述べたように第二段階で決まるのである。

その理由の第一は、「有名だ」という述語が主観であるかそうでないかの判断が曖昧であるからである。太郎が『市民ケーン』のことをとても有名で、ほとんどの人が知っていると思っているれば、それは太郎の主観と捉えることができる。『市民ケーン』の場合は英国映画協会発表の「映画史上最高の作品ベストテン」で40年間連続1位に選ばれるほどの作品ではあるが、映画に興味のない人にとっては全然有名な映画ではないと思われる可能性も高いと考えられる。しかし、『ハリーポッター』や『スターウォーズ』のような最近の映画の場合、「有名だ」という述語において話し手の主観の働きは弱いといえるが、そもそもこれらのような映画は一方だけの知識という

範疇に入らないため、迷わず共通知識の「あの」が用いられるのである。

第二に、「有名だよ」という述語に隠された意味が「その」と「あの」の許容性に関わるからである。話し手が実際に発言していなくても「あの映画とても有名だよ」が「とても有名な映画なのに、知らないの？」や「あんなに有名な映画なのに、知らないなんてウソでしょう」という非難の意味を含んでいるとすれば、「あの」の許容度は増す。「太郎：知らないの？（あの）映画を知らないなんてウソでしょう。」という文のアンケート⑫でほとんど「あの」が選択されたことからわかるように、話し手の主観が強く働く場合は「あの」が用いられるわけなのである。これは話し手の聞き手に対しての評価といえよう。

以上の通り、「その」と「あの」の両方が許容できる文においては、話し手の主観がどれぐらい入っているかと、発言してはいないが、裏に含まれている意味が主観的であれば「あの」の許容度はかなり高くなると考えられる。

(17) X：北海道にね、富良野という町があって、そこはスキー場で有名なんだ。

Y：へえー、そんな町聞いたこともないな。 (神尾1990)

(17) は指示詞の「そこ」を基準に考えた場合、前件にも後件にも話し手Xの主観(意見、感想、評価など)が入る余地のない文であるため、(16)と同じ述語である「有名だ」を使っても「そこ(ソ系)」しか使えない。富良野という町を思い浮かべながら述べるような文ではないのである。しかし、(18)のように前件に北海道の富良野での思い出などを述べた場合は感想といった話し手の主観が入るため「あそこ(ア系)」も許容されるのである。

(18) X：北海道にね、富良野という町があって、去年3回も行ってきたけど、映画のロケ地だったラベンダー畑やぶどう畑がすごくキレイで癒されたんだよね。そしてあそこはスキー場でも有名なんだ。

Y：へえー、そんな町聞いたこともないな。 (作例)

7. まとめ

以上、知識や体験の共有がない状況で「あの」が許容される場合について以下の仮説をたてて分析・考察した。

話し手だけが知っているまたは体験している指示対象を指し示す時、

【第1段階(述語そのものを判断)】

- 1) 叙述部で述べている事柄が明確に話し手の主観(意見・感想・評価)である場合は「あの」、叙述部に話し手の主観が全く入っていない場合「その」。

【第2段階(発言されていない、文脈上の話し手の気持ちで判定)】

- 2) ある程度話し手の主観を帯びるような叙述部であっても、文脈上、話し手が事実だけ

を伝えようとする場合は「その」、文脈上、聞き手に対する主観的な意見・感想・評価などを含む場合は「あの」と決定される。

アンケートの結果、上の仮説は支持されたといえよう。つまり、「その」と「あの」どちらを用いるかは、叙述部の主観性に関わるが、述語そのものだけではなく、前後の文脈が影響し、主観的な意見・評価・感想などと単なる事実のどちらを伝えようとしているかが主な要因なのである。本稿の仮説を図にすると次のようになる。

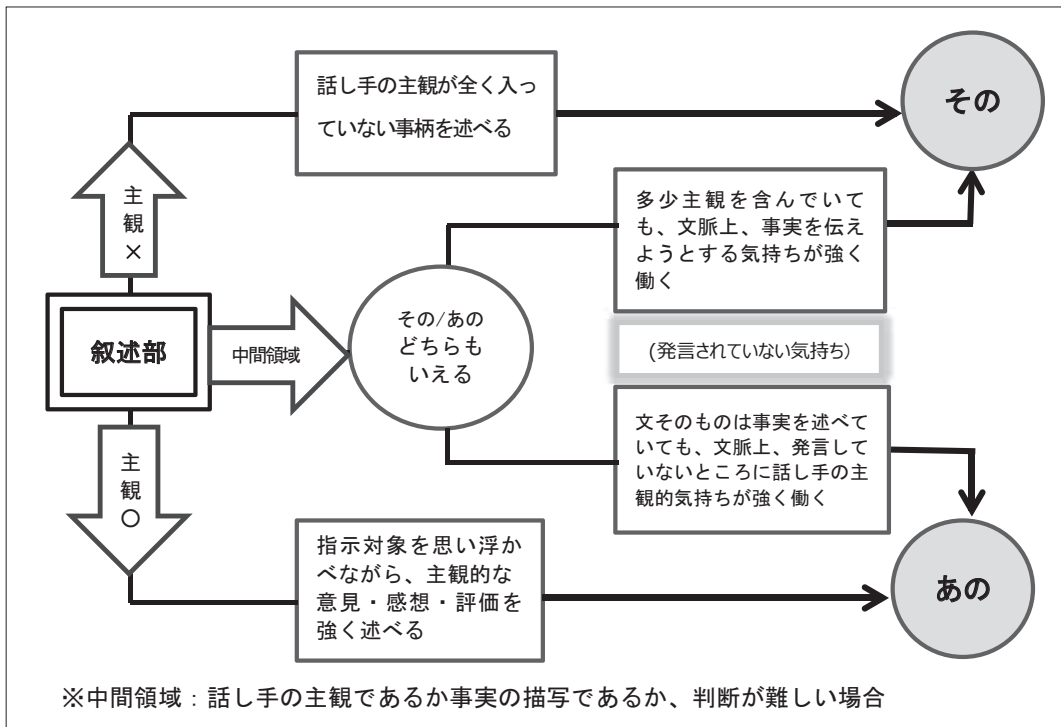


図4 「その」と「あの」の選択要因

本稿で述べた仮説は、話し手(知っている・体験している側)に限るものである。聞き手(知らない・体験していない側)の場合は、話し手が持ち出した指示対象を「相手側の物事」として扱うため、聞き手自身の主観を含んだ発言であってもソ系を用いる方が自然である場合が多いと考えるが、検証を行う必要がある。今後は実例を用い、話し手の主観と「あの」の選択の関係性について分析を進めたい。

【参考文献】

- 井原なみは・入戸野 宏 (2012)「対象の異なる“かわいい”感情に共通する心理的要因」『人間科学研究』(7) pp.37-42
 広島大学大学院総合科学研究科
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論：言語の機能的分析』大修館書店
- 金水 敏・木村英樹・田窪行則(1989)『日本語文法セルフ・マスタースリールズ4 指示詞』くろしお出版
- 金水 敏・田窪行則 (1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」 金水敏・田窪行則 (編)(1992)『指示詞』(日

- 本語研究資料集 第1期第7巻) pp.123-149 ひつじ書房
- 金水 敏・田窪行則 (1992)「日本語指示詞研究史から/へ」 金水敏・田窪行則 (編) (1992)『指示詞』(日本語研究資料集 第1期第7巻) pp.151-192 ひつじ書房
- 金水 敏 (1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6 (4) pp.67-91 言語処理学会
- 久野 暉 (1973)「コ・ソ・ア」 金水敏・田窪行則 (編) (1992)『指示詞』(日本語研究資料集 第1期第7巻) pp.69-73 ひつじ書房
- 黒田成幸 (1979)「(コ)・ソ・アについて」 金水敏・田窪行則 (編) (1992)『指示詞』(日本語研究資料集 第1期第7巻) pp.91-104 ひつじ書房
- 迫田久美子 (1998)『中間言語研究—日本語学習者によるコ・ソ・アの習得—』漢水社
- 迫田久美子 (2001)「学習者独自の文法 学習者は独自の文法を作り出す」 野田尚史・
- 迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 (2001)『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 澤田治美 (編) (2011)『ひつじ意味論講座 第5巻 主観性と主体性』ひつじ書房
- 高梨信乃 (2010)『評価のモダリティー—現代日本語における記述的研究—』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (2009)『現代日本語文法7談話・待遇表現』くろしお出版
- 入戸野 宏 (2009)「“かわいい”に対する行動科学的アプローチ」『広島大学大学院総合科学研究科紀要. I. 人間科学研究』(4) pp.19-35 広島大学大学院総合科学研究科
- 吉本 啓 (1992)「日本語の指示詞コソアの体系」 金水敏・田窪行則 (編) (1992)『指示詞』(日本語研究資料集 第1期第7巻) pp.105-122 ひつじ書房

〈引用辞典〉

- 大辞林第三版 (2006) 三省堂
- 新明解国語辞典第七版 (2012) 三省堂
- 大辞泉第二版 (2012) 小学館

注

- (1) 本稿の例文の文中の記号「*」は不適格、「?」は不適格とはいえないが不自然であるという意味で使用する。また、作例の下線や記号はすべて本稿の筆者により、引用例の下線や太字、また、*?などの記号はすべて原文の筆者による。
- (2) 「話し手」と「聞き手」の区別は難しいが、本稿の仮説では、指示対象を知っている (体験している) 側を「話し手」とし、会話においてはその相手である指示対象を知らない (体験していない) 側を「聞き手」として扱うことにする。
- (3) 澤田治美 (編) (2011) にも「主観性」や「客観性」などに関する文献が多数存在する。しかし、本稿で用いる「主観」「主観的」「主観性」などの語は、話し手自身の感じ方や見方が基準となるものであり、本稿の論はそのようなものが叙述部に含まれているかどうかによって「その」と「あの」が決まるというものである。したがって、先行研究による主観と客観に関する論とその解釈を本稿に適用することや、主観が含まれていない事柄を「客観」と言い切ることは難しいのである。そのため、「主観的: ①表象・判断が、個々の人間や、人間間の心理的性質に依存しているさま。②自分ひとりのものの見方・感じ方によっているさま」(大辞泉第二版) を参考として「主観」という語は用いるが、「主観」の対義語としての「客観」や「客観性」という語は用いないことにする。また、これ以上「主観」と「客観」に関する用語の問題には立ち入らない。
- (4) 「意見」は「①ある事についてもっている考え (後略)」大辞林第三版 (2006)、「②ある問題についての、個人の考え (後略)」新明解国語辞典第七版 (2012) を参考にし、「～するといひよ/～たほうがいいよ/いけな」のような勧めや忠告、または「～と思う」で話し手の意見を述べるものとした。
- ・「感想」は「あることについて、感じたり思ったりしたこと (後略)」大辞林第三版 (2006)、「ある事柄について感じたこと (後略)」新明解国語辞典第七版 (2012) を参考にし、指示対象や聞き手に対して話し手が感じたこととした。
- ・「評価」は「①物の善悪・美醜などを考え、価値を定めること (後略)」大辞林第三版 (2006)、「(後略)」新

明解国語辞典第七版(2012)を参考にし、指示対象や聞き手を褒めたり、非難したりするものとした。

・「事実」は「①現実に関わり、または存在する事柄。本当のこと（後略）」大辞林第三版(2006)を参考にし、その事柄に話し手の主観が入っていないものとした。

「評価」「意見」「感想」の判断においてはどちらにも取れるものがある。高梨(2010)は、「ほうがいい」について「当該事態Pを望ましいものとして評価すると同時に、それと反対事態～Pを望ましくないものとして評価する」と述べ、また、「聞き手への行為要求として用いられる場合にも生じる意味に幅があり、文脈によって〈勧め〉にも〈忠告〉にもなりうる」と述べた(pp.63-66)。表2においては、「ほうがいい（～といい/いけないを含む）」は勧めや忠告のような文脈であるため「意見」として分類することにした。

- (5) 新明解国語辞典第七版(2012)によると、「癒(や)し」は「精神的な不安やいらだちなどをしずめて、平安な気分させること。ヒーリング。「癒しの音楽」と定義されている。また、大辞泉第二版(2012)には「いやし【癒やし】肉体の疲れ、精神の悩み、苦しみを何かに頼って解消したりやわらげたりすること。【補説】昭和60年(1985)頃からはやりだしたか。」となっている。
- (6) 「女性の方が男性よりも幅広い対象をかわいと思うことが多い」という結果は、井原なみは・入野 宏(2012)でも同様である。本稿のアンケート調査の被験者が全員女子大学生であることも、設問⑥で「その」の方が多数選択された結果と関係があると考え、これについては男女差や年齢差があるかについて検証を行う必要がある。

(日本文学専攻 博士課程前期 2015年修了)